

次につながるもの

瀨尾 夕美

国立音楽大学の学生時代、私にとって図書館は常に新鮮な刺激がもたらえる場所であった。自分の演奏テクニクを模索し、思い悩んでいた時、図書館のカードボックスの見出しから「ピアノ演奏法」を見つけ、引出しに収められたカードの順に、夢中で一冊また一冊と読み進めていったことを懐かしく思い出す。通学の行き帰りに読んでいると、著者のピアノリストに直々レッスンを受けているような心持ちになり、無性にピアノが弾きたくなったものである。それらの本からは技術だけでなく、音楽に対する厳しい姿勢、演奏家としての使命、作品への深い洞察など多くのことを学び、今も自分の糧となっている。

美しい響きを追い求め、コンサートにも足繁く通った。アシケケナージが演奏したラヴェルの《亡き王女のためのパヴァーヌ》には、あまりの美しさに涙が止まらなかった。ステージ上の彼に赤いバラの花束を差し出すと優しい笑顔で握手を下さった。温かく厚く安定感のある手に包まれて、この手が奏でたのだと感激ひとしおであった。

それを機にラヴェルの作品に没頭した。明晰かつ緻密な筆致で、色彩豊かな作品を生み出した一方で、晩年には脳を思い、自分のサインすら書けなくなり、孤独に苦しめられた人生に心打たれた。「ラヴェル生涯と作品」(ロジャー・ニコルス著)「ラヴェルと私たち」(E.ジュルダン・モランジュ著)などの本には、数々の逸話と写真が収められている。終の棲家で、お気に入りの眺望と調度品に囲まれて過ごしたモンフォール・ラモリの家に、いつか訪れてみたいと思うようになったのもこれらの本がきっかけであった。

時が経ち、パリを訪れることになった私は、今は記念館となっているラヴェルの家を訪ねることにした。モンパルナス駅から鉄道で約40分。モンフォール・ラモリ・メレ駅は、閑散とした無人駅だった。道標を頼りに小1時間歩き、ようやく街に辿り着く。そこは、中世の面影を残す石畳の街。曲がりくねった坂道を登ると、とんがり帽子をかぶったような、ラヴェル自ら展望台(ベルヴェデーレ)と名づけた家がある。小人の家のような小さなドアを開けると、チェス盤のような白黒の大理石が目に飛び込んできた。各部屋が一本の廊下から入れるよう整然と並んでいて、部屋のドアの上の壁には、日本の浮世絵が一枚一枚飾られていた。ピアノの部屋は、紺の壁紙で、落ち着いた雰囲気である。部屋の隅には、お手製の飾り棚が三、四段据え付けてあり、東洋風骨董品の小さな壺やカップが鎮座していた。夜になると紺の壁紙は、たちまち闇と化し、ピアノの上に置かれた二つの丸い灯りは、さながら宇宙に浮かぶ惑星の如く輝くことだろう。館長のマダムに促され、ラヴェルの愛用したエラール製のピアノを恐る恐る弾いてみた。とても軽く浅い打鍵で、甘美で伸びやかな音色が、板張りの床の部屋によく響いた。ラヴェルが愛したバルコニーから望むランブイエの森は、緑深く、豊かだった。丘を渡る爽やかな風が、私の心の中を吹き抜けていった。

図書館は、私にとって、いつも尽きせぬ探究心に応えてくれる場所、より音楽人生を豊かにしてくれる宝庫そのものなのである。

●はまおゆみ 本学専任講師(ピアノ)